うらら衣

後編

へ 5
5679

門へ8
號5679
巻

編笠賛　幽霊説　杉乃門序
與時亭庵文　盆石記　悼子孫文
六十齢説　唐茗頌　與舎蟄子文
清水原法師文　潤光斗賦　岐路賦
四州之記　六林文集序　与平説
聯句茶引

京都帝國大學圖書之印

編笠賛

迹を浜山の雲よりなほ一身を蓬生に隠し
て浮世より通てあれど新たなる人も達てやは
あむ蓬莱の海外なる異の持る宝ハ古くす昔
時明の浦歌の秘術を得て世に編笠とふもの
ありなを載いく出る時ハ車馬繽紛たる市中をあけ
て人我を忘れてやきて朱霞の夕られ乃外地乃
味いろあるやてもあきくるも遠ひ節香ハ
の世をうり淫うひよみ言も主人の果てもみち
出ハ半後通用の宝うして今泰平の世中ハ珍

貴本
氏書
中堅達堂
藏書之印

きくしの塵より其德をもつとに優なりとも
女はらに生まれは似合てきくしのことをみく
けれあらに生まれよく似ることをいれし法十郎は
生まれていあくさりは見とかくうなれよりあるはぬと順孔
あみ糸のあるもよりきくれさると茶屋の焼印は宗大納言
のもとをきくもやう京中名物名吳のこぶしは世まある
財に歩をすれてゐ幸帳紅屋の内まても種をきるれ
器あれも今紀の宮に居のくつれすくうに紀
又紀ていれ漂泊の家月とをつきくや品川
くり新毎くも君と出てる掘編笠と張
いわく仮名と所云の生途をもえ居るまて疾風勁
をもりれの調むよをくく操もけれよりもくる

されも異國ハけ宝をもくさるる緑譲ハ新と
居りるく漆をさして麻をあり伯休ハ蓮と書れ
もも女くくよくけれくりくくや我名ハ
四もの一蓋あくは大居の德あくも安く新京
居るくくくう

編笠の俳居者や年乃市

歯吳論

畏一口のいきちひもあく妖物のやくくもけ子歯吳ハ
くもいるあるきてを絵とつ絵にくれと三角ある
紙をいくくき廣仲のまくに竹杖をつき猪より下ハ
ありもあとあいもあくあら周浮ものくくや子細

らきふ雄(オ)蛙灵のみりあるを
雌(メ)蛙灵とも云へり多くは彩猪の俗よりて布施
あるいの俗と称し或は剛なる侍とも云ふとも
也とあり何の用もなきよあるられさ女ワへ
とあり又ふ水のく蛙灵の生さうるーうあや
人死く蛙灵の自由あるは佛果を以ぬ亡者をは
我少くを云り来く訪ひ弔ひのあるらへ勿論
なして言弱しる中宗の こうあ儀の釈仁の寄居
しく先るえ浅のあるまてと生く安独の雲は
構よへきをあるし世の寄なる沼へありしあき世中ま
蛙灵のあるく稀なるいむさふおこさぬあの世の法文
あるれされて和秋の盗金をみて萩灯籠み在家

をとりかるけ麻末の俗にて索麺国子の獄を
をまるけく家まを招請をれて表つよりをを引
つまくまれやに来るらむも何の遠を思うあるへきま
を伴ひ及りぬ近ひ火の弦を生くうを中ーと
とあるを編中をの伊達深の中く俗をひと耻る
をやをも中国をを世ふ蛙灵の名ふあれをい
つくを俗先の穴もをを生をり正をを者をを
をれて蛙灵をあるくをあるふ世俗のまくあやを
あり知をいふ世先の蛙灵法をのりとある
故実者の中しき

笠をして蛙灵沼ををれ弦

杖の門序

季真ハ金の亀を解き祐乗ハ銅の猿を彫て酒にか
へし風流ハ仮初にても酒盛ハいつこの誰にてもあ
らんいさゝか雲の端にかゝりしにも聖の
名にも文六ゝ名を末ゝにさる酒盛宴かしこにとさ
る者をしらしひ継て一つに酒盛の新
之世ありしてゝの文字みさゝとさまゝみえし
あまみれにありて極楽の出店にもなれるものかん
姿も木の端の法師とて世に此得意を附む
として撰集一部をなむしるせあり只にも酒腸の気
あしを問ひて月花の万人をわすれさせむとて
此屋の夕顔に讃させても雁(カラウス)の和ふるも御書より是酒桶

の一ツにもあらんは壚に文君かありてさらに折角と
呼よ姫もなし人ともや悟たる固にハ七宝の基
もゝやなす菩薩の音楽も皆かゝされても救ふる
門の極楽とまれて杖頭に銭をかけく迷ふ人ハ
迷ひもすむ只己か身の深緑の上戸を悟らせ
置く也酒盛の酒にて酔ふへしとて
月花の下戸に安心子や酒まし

與附節序文

屋號乃西南に把茅の一庵ありこれに住るハ亀
法師にてひとえいふまゝあれてころもとを談く
日々世のさまをこゝに菩提に心をかけるの人家あれ

と必佛あり我も甚遠きものあらねと
既天の浄刹のうちて朝夕數十年を経すし
て佛に向ひたてまつりせんすいまを十万億土
乃遠きをもてまつりて己れの佛とはけを居り
佛像いまをてあらんとあらんしされと此あるいの古れ
と只芭蕉翁の像一枚と刻をあるの年を
をてうも我生涯あけらを遊子ふるもしふ
偏に蕉翁の俳諧を生涯をまりて和を徐諧をのつ
讃佛系の因とあるはうけのうるかりをも
同しうまの自をてをの我もと高家子
者ふをく昔ハ十月なるこてに三年を経をあり
らをしてををを出世のわるる効はの此林

みハやへきをあり同しく時西のナうるハ弥よ為ま
しき祥をあれをみをを世の朝の奉をあるを奉田楽
のさひよへをを生を一年の今日を定ち同志の友を
ををしく一巻乃祭をあるさんをあり和をくハ虚堂下
に此道の光いやましよりけををを祭奠ををて永遠
へくいうを山報謝の志も書くをの世に残をへしを
の奉ををいを不生の如く我ゆき同朝の志をを
うをつきあまをまを奉ををにうしてを奉をを浄土
に行をて訪をををの一しを

盃石記

盃石あり江の高を名つくを永をゆけをを

あり虎の怖しきあまり仕出るようにて虎に
虎に遇るる人ありて実に人のいまだ見ざる
ようにて赤い石より射る所名をいはこれに癒
ようにてようやきハゞ壯の山にはるかなる
交みなく今も絶壁の高きあるいはやや
山石の窓とうるにとうるうるうるして峯巒
谷遠くに裾にこと山一つの巖穴あり生ずる
此名のようにしるしるし人一語の記を請うるあるに巨灵
もに擘き拓来るるの毒公の御ふ地を縮ら
ちいさんも今ハ文人のいひうるる糟粕なり
ちあるよりは法ハ彷彿の名あるのあるに妙高天乃
遠ざれまし雲陽あれを点の絵のようにも

[illegible]

手ハえも及ばるるて十四年のまを学して
くふ体を石より削りあり風騒の人のまに伴る
あるんを人ちまるまに風物にあるり生と文奇の
産石より出るへくふ詩に和合ふ佛語より知んま
非風をのつくむあるうるるるるを

波をしるの名のうるうるを

悼子禮文

ようて十人の友を失ひうるもまくハ数の内
ようてようて日あるるるるまに生ひ拙ひ出へるるき非
老々一人の友の剛るるハ歯の落るるこるるるる
生ひ出るるるるるるるるるるるるるるるるるる

久しくしれる子礼翁は睦月のはるあまりの身
まかりなは老一といひ仕舞のちかしを遁れさるより
残生を風雅に寄せて人の友にまじはるにも聊世
の是非を論せずうちまもる人の書経をいさすよく
知る事も知らざるが如く知らざる事は下問を恥ぬ
まことに深き縁ありと知る人も称嘆
せざらめや今や世の惜むべき尋常ならざる
よして同じ老の身は根一つのあはれさより
といふのみ

六十齢説

魂まつり秋来む居みきこれ

上寿は百歳中寿は八十下寿は六十といへり蒲柳
の質の身のうへにて六十の齢に到りなの寿の数には
つらなりたんりのは出月の留る家せられる日なり
まして世の人の賀とてもてはやさるべき年なり嫁あり
妻あり男女の子まであまたありて家はみな孫あり
とりめでたしとやいふべきそれはさらに犬馬の
年をくりにてあるへしむかしのもろこしの詩を
作り和歌をよみて世にもてはやさるべき家
に生れてはいまはしかりかたをいはんかたもなき
くさる事もなしやや古人の恥をしらぬといはんを
我は恥を知るにもまかせて人にはあざけらるとも笑はらんと
六十でまかりなやまずみのうら　紅案

扶桑頌

まことにこれ和州にいくばくの蒲團とかい
字をいとむつかしく称するものあるを扶桑といひき
天人の妙法を解し及ぶこと媚を求めず自然の
名にして俳諧の正風とこれをいふべし
なる此地にして自ら在るかの中にて所
蕉の如くなるかの質をもきいつべし
しきにさあり生昔孫晨はこれをうき法に流して
より藁一つまみを送り来国の所をいかに
よばせたるものをきくしもみを穴塔乃
ものをはいの外のものといふべし答
乃ものをいかにとあまをとなまをせ弱のりねは

此花の風とのことをなべてこれ此あるの用うるて
必遠をけちをよ赤ハ多病の根低きをきらへて
文も要てすりをとすす強よ此者をうてふと空
よかくをおきる中ゆう駅あるはるのあり
そも世に不用の用とものあるをいてへ人をを乃
さをくをく花をの爺をいつるも地よ入用ハ
是二本をとりて不用れとを楽をを不用をて地を
塩をうちのを二本の是もを不用をを空地を
今をるの不用の用とものあるをいとあるを喻のさる
乎をあるをるちをいとをを知ををいとを扶桑の
神をものををるををを遊をへきを用ハをを
をを不用をを徒利をのをげをき

は仏のごとくすべてを尤もらしく振舞ひ働き
疲つるとも自己のうつうきとのつつの定し
とうりて言を吐くの後とあるるみ翅のく
て叶はぬこと〳〵されと人〳〵常より列と生みんの
つつさる〳〵されとこよひも叶はぬを引ふりて
蒲壇よりあくるあくはは不用の用をさるへしと
そこの言葉よりく〳〵付する

与舎整子文

汎よく人を深へ汎又人を疲とそ非居のうつの
かと汎よ駄ゆ言自己の真ちもよく〳〵変あるま

[illegible]

鈍き友あるさみも鈍き志学の好よりと四十の叶はよ
あるまて猶い呂沖の石れ[illegible]
と昔の人よさいなる[illegible]
触もあ〳〵〳〵幸已の秋[illegible]
いるれる叶ふ[illegible]
碎よりも面白きあと世絶年の変名称と
[illegible]世の[illegible]人の諫も数抗よ学捨
おのこの毒を砕き盗を解きて雲もいと下戸と
[illegible]る業を用さ山る業を[illegible]人の痛欲也
かと下戸はさらあり上戸仲るさ[illegible]
八合もつくさしく残[illegible]
[illegible]

やまとされと相の書きよりまと絵て清物なり
二月の花よりも紅葉柿の深きより甘くなりぬる
味ハ密砂糖よ捨ぬるとなく生れなるこのトヒよ
ハ落てもの書きよ成るまし〻姫の深よりる
あるこ〻ハさらはこ〻名の整をも金く学ひたる
隆を拾〻みに奏女をと甘あしく毒い芳の群郷
よハ医をさこ〻とへこ〻と舎整のこ〻ろよ浮く
浮るまし〻ろ

賜石及法師文

てゐ〻のまし〻みよ家ハ蜘蛛明ハこ〻
やまれ点ろも法をを夏ろく苦しさを

宇こ〻ハきこ〻徐ハ〻不及法師こ〻求こ〻るこ〻ろ文の
栖ハ〻ハこ〻ろ樹下名上のまるこ〻ハれさ〻ハ傍をと
いこ〻のなこ〻ろ詩こ〻る屋も雨ハ〻ハ汗ハ只家を
のあつ〻て永まに学ろこ〻るこ〻ろをこ〻ろ文の
車こ〻あ〻て名歌の名ハ拾ろ安し沒て平
津梁の大志あこ〻ハこ〻ハ只神龍の雲法つ〻
のやこ〻ろ〻て辛ろ地中のあまこ〻ハ手ろ
我こ〻ろ

ふこ〻あの安こ〻ハこ〻ハ〻こ〻ハ牛

濯老井賦

広角ろ〻ろ〻ハこ〻ろ〻こ〻ハ二月のあを献そこ〻ハ

華清の温泉あり泉の事さらとよみしハさつる
山ゐの清らゐゐんそれハ至るの遊ひよりこれハ
侍者の茶ゐと勝くゐれよりこれよりすす
甚二ゐのゐに湧出せる温泉井あるものあるこれ
布袋屋の名水ゐてあるハちんゐゐ楚つの
俳諧ハ極よくゐり昔ゐ有名の徒にゐて茶花
のゐ清出ゐ天ゐ風雅を感して強ハ此井の手
ゐにゐあゐ也あゐのこゐハ雪山やゐより甚名
ゐれゐる年ゐゐゐるゐゐハさらよしてゐハ昔ゐ
沼ゐ沼親の欲の清を沼して秋ハさやけき月を
ゐゐへゐの茶の茶と煮ゐゐも氷を敲くゐを
岩ゐん四月の遊ゐ老のまさにゐるゐらす海ハ

ちんゐ温泉の名ゐ山ゐゐゐるゐをされた
永ゐ少一ゐゐ金ハ泉を欲ハ旨ハ金と指ゐゐ
はゐ井のゐを甘ゐゐハ人ハ俗金風雅の猶ゐ
ゐも忽三石のゐ茶をゐ一

岐岨賦

宋曾 岐岨 吉義 を 通用

信濃ハ山ゐ尾藩ゐ信ゐ郡ゐ岐岨の山ハ即
封疆の内ハ入ゐりゐゐゐゐの巴笑ゐるあのこ
ゐゐ手ゐ茶庭ハ高ゐこゐに甚北の山川勝槩を
話ゐ語ゐゐ極ハ語ゐゐあり甚不ゐを述て
賦を作出ゐゐされ本多ハ文武帝大宝二年
ゐ此ゐを筆ゐ山ゐ西東両都の通路ハ

して市もこの谷の往来をはいさまとふまもなく
ふいふまでつゝいる茅ぶきの宿こ当駅ハ本多
家の四万石ゆくゝ[illegible]ハ御[illegible]殿と[illegible]て壮麗沒京
上松福島ハ山中の一都会別巴矢も[illegible]
[illegible]越藪原風[illegible]櫛井の里贄川の宿ゆ
十曲ゆ驛亭ゆ家ゆ井つゝ[illegible]大名の往ゆ
ゆ陣の幕をし翻ー[illegible]馬の給ゆ幸拔ら山を通て
今ハ推の茅ぶにする不自由もなく[illegible]
[illegible]茅ぶ[illegible]呼子鳥の[illegible]
聊の行接ゆ[illegible]て渟麓の風を恐ぶ[illegible]
邦昔よりの法令ゆ[illegible]
幽谷ゆ難所ゆ[illegible]人ハ偏に蜀道の險ゆ比し

断腸之哀の情を懷き和分ハ義好法師ら世を
遁れて[illegible]拔[illegible]ゆの[illegible]
しゆ生ゆ山中をして[illegible]俳諧行脚を連
みゆ味ゆ[illegible]
[illegible]
博山あり福島の奥禄寺ゆの越の徳恩寺ゆ各
ゆ[illegible]を[illegible]の松矢[illegible]
故宅御料の森ハ光[illegible]の薄迹樋口谷ハ義光ら
四郎稍の少[illegible]
ゆ遺る山中の[illegible]ハ行基の作臨川寺の寝覚の
産ハ仙女の約[illegible]石怪巖人ゆ[illegible]
[illegible]も[illegible]人の墓ゆ掛橋甚京御坂風越乃

筆小無の源はすべて飛弾なると戸雑法布引
の名を常とさるは都に遠き信濃男瀧女瀧
の奥ハ[illegible]も連理の松ハ[illegible]名[illegible]
烟の淺[illegible]山ふこてよ境のへ[illegible]も清嶽駒ヶ嵩よ
石[illegible]の[illegible]を[illegible]て富士[illegible]も肩を並ふ[illegible]
の[illegible]の齢ハ[illegible]巴女[illegible]男力ハ男
[illegible]の[illegible]名[illegible]也良材黄[illegible]伐[illegible]
[illegible]より運ひ[illegible]万家の用[illegible]て洞川[illegible]
[illegible]張る[illegible]ハ[illegible]高工の御よ別く曲[illegible]踏[illegible]
の自在と働く他郷の[illegible]ハ[illegible]伊勢
の[illegible]ハ湯舟沢より[illegible]御[illegible]て福[illegible]ハ開門あり
て[illegible]世[illegible]倫く[illegible]く[illegible]の[illegible]も[illegible]ハ[illegible]

山村氏のあ[illegible]も[illegible]
明神[illegible]の
青[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]伊[illegible]川[illegible]川[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
を分て[illegible]堺[illegible]
と石の[illegible]茶[illegible]十名峠の名に[illegible]ハ俳諧
宵張の古[illegible]て[illegible]峠を越[illegible]
正月の[illegible]ハ[illegible]新[illegible]の風俗[illegible]盆の[illegible]
ハ[illegible]踊の風[illegible]牧[illegible]
巣[illegible]ハ[illegible]より[illegible]東部く[illegible]
[illegible]けやきの[illegible]

仙家又尋ねむと求むる所千顆岩前芙蓉ハ
殊更佳名ありて名月あの夜と賞て末川の其
風情又世に超られて客泊あまの釣舟遠く
響又ゆゑなく秋の紅葉ハ里に先うつり折法濃ハ
十郡に賦豈一國の半をもとさんや只是を其所
屬るゆゑを繕ふ拙きまゝつゝぬ

四州亭記

尾州の西に一亭あり四州亭と名づく
濃に勢のこゝを兼く一方の内ハ入たるなり
一方に入るゝのハつゝゆゑ山のゝとゝ
山ゝ好を擅ゝ東山ハ

移文のゝきゝもよりゝ人ハ程仕安の
分に有ハ修繕ゝて西山も佳ゝ
ものゝゝ此亭の山ゝ
る低の容淡濃の多ゝ
雲ゝに那ゝ有仁者の樂ゝといふ程屋
あるこゝ論て深く吉野の奥を尋ゝ分
の隠ゝ求る者ハ偏ゝ山の世に遠き寂寞を
求る者ハ多ゝ拄ゝ麓を挑ゝ高の紅葉の
夕を惜ゝ心の風景ゝ雲ゝ雲ゝ必
霊連の屋ゝ烟ゝ舞ゝ山の寂寞を問ゝ
を物ゝ出ゝいつれの賞ゝ心ゝ情ゝ丈ゝ國一の
名山ゝ高ゝ烟を深ゝ只眺ゝの上に

[illegible]の高きを望みて富士
[illegible]必ず風雅の人のあるべきなり
山に入る人山をもかきわけいつしかわらんとみ
く嬉しく人もみるべし庭の[illegible]山ハの風景
とかくするまで寂寞を楽しむ山にあるに飽て
[illegible]侍るべく山なく起く樽に侍るべく山あり
自由ハ名画を案舒[illegible]ハ[illegible]きかを[illegible]
浅深の[illegible]も下視[illegible]書のまま求
[illegible]を[illegible]撫に摺[illegible]を[illegible]
[illegible]ハ[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]同じ広の夢に[illegible]紫の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

[illegible]三 [illegible]後中十四

懼[illegible]辞[illegible]きあ[illegible]信[illegible]
[illegible]

序

俳諧の世に行[illegible]や今ハ縉紳の[illegible]より
[illegible]の業なる人[illegible]
[illegible]の[illegible]
我蓬[illegible]を生[illegible]
一[illegible]
[illegible]芭蕉の句[illegible]
[illegible]
[illegible]俳諧に[illegible]
[illegible]

あら案じ小説やうしなふむる蛙も俳諧
ともいはるへし去りなに世の俳人とよむなる七
部ハおへし只俳諧の文章ハ流し風俗文選せず
紀ハ先づ其体を学ふ者のみあまりよしといふ
ものハ甚稀なり古人の文とても風体さまざま
是翁の文を評するハいとうらさまさまに
潜ふ先をいふへくハ蕉翁の文ハ正しくして俗中
に雅を失ハずさしくハやさしき人の編ぜる織に
やうして花の如しにあれど因楽園のに
是をみせて茶なり飲ぐやうにいふ如し其位
に至るめ人の及ふるやなきらん東花坊支考か
文ハさまざきて遍くすなわちいひかくれとく

情を深く含ませたりしかして諸藝に務めする當
世男の一夜の因みに縁となりて物のまなり捨てる
ところ彦根の許六ハ物の姿情をよくらいてく詞を
飾るにおくれてや男きに似かれともさりとて
雅懇のなまにあらでなかくく行りしの思ひなると
人をよく見たひれて狗を語る人八喩く大道に
肩いからしあれたるかに人なきかごとくしらん其
餘禄ともらハ論に及ばず只和漢の故事古語を盡
俗の諺をも入されり去程を見ひくあらハみなす者
と編み既まとこ形して俗なれ雅になるを主意
よくわきまえを貴きとすとして調ひたる文章に
いふゐ洲に難かるさとかへハ素友護花實の六林子か

文章章こゝに出をゝる物を獨り家学の
目を驚して之の金を遊ぶに動る他いなるべゝに
如何誰か其右に出むされゝも音を知る人は稀なる鑑
洋々もいゝゝよ猫に小判の耳なれゝて自ら
出を世にあゝゝす只独の楽とすゝるゝ
輯録ゝゝ序を求らる久しく金葉の
裝あゝゝ辞すれゝさ甲斐なく不才の稿を
探りゝゝ世に當むされゝも又さゝゝのあり
世に異録と廣ゝ家の編子紛後編紛は庫
庫に満ゝゝれゝも入口の暖簾は必ず締として
用をゝ店を尋る人のまゝ店子貝と為れも
暖簾は相のよしあゝゝいゝゝされは家々本絆の

才をゝゝ始に一言れ暖簾を掛むよりゝ店
の便を始けんやゝつみゝからず序をく始りな

無号説　為紺屋巴良

和分ゝ世にゝゝゝ昔男の昔をきけも
芥川のゝ義よあゝゝ名の撃を切られ詩賦は秀
しゝゝ人は河内に掛のゝゝして胡ゝ
の焼鍋ゝゝゝゝ
風雅必ゝゝ家を潤る助とゝゝす道は家
文章もゝゝ富を求ゝゝ家業にゝゝ
ゝ人の世にきけるゝあゝゝの世に
の連歌にゝるゝゝ宗匠を招き語一

なの奥ゆかしさに及ひなるゝ我ゝ向れ吹よ掌ゝ掌ゝ
入ゝゝ対書に人の書ゝ僅よ一二綴の胡椒
を知る者あり扨しも庶に意外のくゝあきをとて
系句を惜ゝゝ他に漬ゝゝ書ゝゝ之胡梅と
高い生ゝゝ名と字抵ゝゝ浴ゝ感ゝ世ゝゝ
人の連歌よ点ゝゝゝゝゝゝ書ゝゝ名ゝ弱ゝ
称吳ゝゝゝゝ書ゝ俳諧に聴ゝゝ吹ゝゝ
忘ゝゝゝゝ書を砂ゝ家を法ゝゝ既法ゝ鞭
の先能ゝゝゝゝゝゝゝゝこれをゝゝゝ俗埒哭
も情突ゝも同ゝゝゝゝゝ俳諧ゝゝゝ或ハゝ
牙持ゝゝ系譜ゝゝゝゝゝゝ俳諧ハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

第一の主公とすりて之丹の冥ゝゝゝ叶ひ表大正
も風雅を助けゝつゝゝよ俳諧の妙處ゝゝゝゝゝ
今や其居に号ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
藍光舎ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
蓋ゝゝ出ゝゝ蓋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

聯句第二

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

爰にある老僧の語ひ来て出り我閑談をきいてこ
なすむ人そこと問へと近き方のなすむとまうされ
いつそ棍閑に及ぶ聯句せんと来りて挨拶の
発句を唱へ妖僧云秋の客と呼そや能歌の
二字を取る延ひ屋の屋をつらねしとやまへ
文の夕アと賦るを送れと答ふる文語に素園子の
若年もろくて只よきこの史の僅に弾出り

挨拶

錐汲水無蔔
可涼風在蘿
庭囲松気色
山点月邪魔

長吟夜方冷
大跳盃未道
酒醒歎嫁々
茶沸響婆々
撃日四火炙
情春万葉歌
遅櫻留記念
帰雁惜余波
借宿疑狐法
換題試頓阿
耳言牽袖笑
口説入牀和

截指女郎誓
挲腰祖父痾
移數殘暑褥
脫曬有明蓑
濱市初鮭貴
辻能油虫多
花閑粧寺院
析動彩濱河

後うつゝ衣窶屋より明和の末までは掃屋
乃造形をもつてうれをうつゝ

六樓坂